

---

# この地の向こう 1・5章

てるり

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

この地の向こう 1・5章

### 【コード】

N8511A

### 【作者名】

てるり

### 【あらすじ】

一章から三年。レファンド病を治す薬は、一応は出来あがったものの……。

## 1話 再びの始まり

この地の向こう 1・5章

序幕

あまりの、自然災害に恐れをなした、かつての人々は国を空中に上げてしまった。

隕石の落下、火山の噴火、大地震、大津波、おかしな天気たち。大雨だったり、大雪だったり、ひどい強風だったり、雨が降らなかつたりと、とにかく農作物や植物や自然の動物は大いなる被害を受けた。人も例外ではない。多くの人が亡くなる毎日が何年は続いた。それが一つの場所ならまだしも、四方方々で災害が起こっているため、復旧の時間さえも与えてはくれなかった。

とにかく、全ての土地はともかく、人だけでも安全なところへ異動しようと国を空に上げようと声が上がったことから始まった。あれこれ、あれこれ、長い長い議論が行なわれた。

その間に、いくつか沈んだり、逆に海から出現する地面があった。そのたびに会議が開かれ、名前や主有民族が国によって決められ、地方になったりした。

そして、最終的に空に浮かべることになった国は海からの直立飛行に成功し、強風などを避けながら動いている。ノアの箱舟のようだと表現した人もいたが、どちらかといえば、空中庭園に近い。

地上にいた、ほとんどの地方の住人はゆっくりと時間をかけ、地方から国へ移動していった。しかし、住人の中にはこの地を離れないという者も現われ、それは本人達の意見が尊重された。

そして、離れていた小さかったり、大きかったりした地方と言われる土地たちはどんどんくつき、大きな大陸になってしまった。もちろん、原因は様々だが、それでも、地方に残っている人々が少な

いせいか、特に大きな混乱もなく、時間がただただ、流れた。言語は段々、似たようなものになり、それでも、独自の文化はなぜか保護されながら続けた。

携帯は腕に巻くものになったがメール機能はあり続けた。パソコンもテレビもどんどん薄くなっていた。交通機関も徐々に自然にやさしくなるようにと変化していった。

優秀な人材も高額で取引される時代になっていた。しかし、当然全員がそうであるわけではないので、そうでない者はどこの会社にも入れないという大いなる差が生まれていた。

食べ物も得られない者たちは自分達で作る道を選び、他の地を求めて動き、この地は完全なる人手不足になっていた。

そこで、ロボットが急激に開発され、人を手助けするタイプから人にそっくりなものまで作り出された。

その結果、人口よりロボットの方が多い地方もあるくらいにまでなった。ロボットにも権利をと、国で長い時間をかけて議論されロボット用の法律も出来た。それにより、人とロボットとの結婚も認められ、一緒に焼かれることを望んだロボットも多くいた。それ以外にロボットの停止が出来ないという背景もあったのだが。

### 酋長の誕生

壊れても修理ができる者がいなかたせいか、地方にしては珍しくここは人だけで構成されていた。そんな森の多くでの出来事だった。「この子が次の酋長だ」と、子供を抱きかかえた村人は、多くの人数がいた群衆の前で高らかに言った。

この国では（まだ国だったころ）、前の酋長が亡くなった年の最初に産まれた子供が酋長になるという習慣を持っていた。それは、前の酋長が老衰でも事故か、他の何かで亡くなっても同じ事だった。酋長と認定された子供は、男の子でも女の子でも同じように扱わ

れていた。親元から離され、他の場所で育てられるため、その年の母親たちは自分の子供が生まれたことを隠したかった。誰か、認定されればもう変わることがない。なので、後から酋長よりも大きい子供が出現することはよくあった。

しかし、この年、母親トピは子供を産んで死んでしまい、隠すことができなかった。そして、その子供が酋長とされた。

酋長の認定の儀式は、この村の奥の森のさらに奥にある洞窟で行われ、村人の全員が参加していた。一番奥にある水に前の酋長の骨を沈め、新しい酋長の体を清めるといふ行事だった。そして、酋長が洞穴から抱きかかられて出てきたときに大きな地震が起こった。

まだ、何人かは洞穴の中におり、そのまま埋まった。とりあえず、なにか道具を持ってこようと村人たちは慌てて村に戻った。

しかし、彼らの足はすぐに止まった。しばらくになにも、誰も言わなかったのは誰もが目の前の光景を信じられずにいたせいなのかもしれない。

村の半分がなかった。

さっきの大きな地震で、地盤がゆがみ、大きな亀裂が入り、村の半分が海の中に消えていた。家も、土地もなかった。呆然とする村人たちの前に影が現れた。見上げると、そこに、浮かんでいたのは国だった。それ以来、ここは地方の一つになった。

いつのころからか、村人は国にいる村人を裏切り者と言い、戦いが始まった。そして、それは今でも続いているのだった。

## 発表

「臨時ニュースの発表です。長年、国と地方とで分断された村人同士の闘争が行われている、ロスト地方ですが、新しい文書が見つかったとのことです。長い闘争に決着がつくような内容だという話も出ており、事実確認が行われたうち、発表されるということです。では次に……。」

この発表が行われたことを、最初に知っていたのは一人だけだった。慌てて、村に帰って酋長に話した。

「まずいな。」

「ああ。発表されては困る。薬はどうなってるんだ？」

「まだ、飲み薬に放っていませんが、投与はできません。」

「じゃ、もってこい。」

「わかりました。」

### 薬の完成

「反対いいい！絶対にダメだつてば！」

一人で大反対しているのは、ライズだった。

「まあ、確かに、こんなに早く難病が解明できるとは思わなかったわ。どうせならおばあちゃんが生きているときに作ってくれば良かったのに。」

と、同じ研究室にいたルイも腕を組んだ。

ここはシェーマン地方にある学校の大学院の研究室の一室だった。三つ子の長男のリードと、同級生のセンリたちが他の仲間とともに共同で研究しているところだ。その成果が出て、それを聞きつけたリードの弟のライズと、同じく同級生のルカが会いに来たところだった。

「とにかく、ミレのところへ行ってみよう。」

と、リードが言い出し、センリを含む四人で出かけることになった。

「リト、留守番を頼む。」

リードは研究仲間へ声をかけた。

「わかった。」

あれから三年の歳月が過ぎていた。

もうエーアイキラーによって損傷を受けた機械たちはほぼ完全に回復している。

リードはセンリと学校に残り、センリの妹、リザのレファンド病と

いう病気の回復薬を作ることに専念していた。このたび、一応完成したのだが……。

ファルト地方へ

ファルトという地方は、人間とロボットのための村で、他の村から追われるように出てくる人が多い。そのせいか、比較的、ひっそりとした小さな村だった。子供もいても、養子だったりして、ほとんどいなかった。

自然と、この村に来る者も少ない。そんななか。

「ミレー。ただいま。」

車から、ライズが大声を出して、手を振って見せた。車での移動は歩くのと比べなくても断然早いものだった。

「あら、みんな、どうしたの？」

庭にいたミレーは急に現れた、たくさん訪問者に目を丸くした。

「ひさしぶりね。」

と、ルイはにっこりと笑った。

「ルイ、元気だった？」

「もちろんよ。」

「兄さん達も、センリも来てくれたのね。」

「うん……。」

と、センリはあいまいに返事をした。

「どうしたの？センリ、元気が無いようだけど。」

「いや……その……。」

「詳しい話は後だ。リザはいるか？」

リードがさっそく聞いた。

「リザならスーハーの森に行っているわ。待っていてくれれば帰ってくるけど。」

と、ミレは少々とまどったように言った。

「『両親は？』」

センリが聞いた。

「いるけど？」

「そう…。」

「会いたいんだ。」

と、リードがしつかりと言った。

「いいけど…こつちよ。」

ミレの家の中は前回に来たときとあまり変わっていないかった。木の机に椅子、ミレの母親のメルは畑にいた。父親のラフアンは動物の世話をしていた。

「始めまして。ミレの兄のリードといいます。いつもライズがお世話になっていきます。」

と、リードはぺこりと頭を下げた。リードがここに来るのは三年ぶりだった。そして、そのとき、リードとセンリはミレの両親に一度も会ったことがなかった。今回が初めてだ。

「まあ、本当にミレに似ているのねえ…。」

メルは三人を見比べて言った。

「こつちは、センリ。リザの兄です。」

センリも、礼をした。

「リザがお世話になっていきます。」

「あら、あなたが。リザも喜ぶわ。」

と、メルはにこにこ笑った。このロボットの母親は、詳しい話をミレから聞かされているようだ。リザも養女としてこの家にきている。病気のせいで、毎日自分のことを忘れていく母親が、育てていく自信を失ったせいだ。実の兄である、センリでさえ、リザは一日たてば忘れてしまうのだ。

ここに、リザがいるのは、この家族の三人が唯一覚えていられる人たちだからだ。

「それで、今日は私に何の用かな？」

外の動物の世話から戻ったラフアンが言った。

「実は、リザの病気のレファンド病を治す治療法が見つかったんです。」

と、リードが切り出した。

「ホントに？」

ミレは目を大きくして言った。

「ホントよ。でもねえ……。」

ルイはためらった。

「でも？」

「問題があるんだ。」

と、センリはしぶしぶ言った。

「問題？」

「ああ。とりあえず、私とセンリは螺旋の研究から行なった。通常の場合とどこが違っていているのか。で、場所はわかった。どうして、そうなるのかはまだわかっていないが、直す方法は見つめた。ところが、普通は薬が出来たら、動物実験するんだが動物をレファンド病状態にすると、死んでしまうんだ。」

「死んでしまう？だって、リザは生きているわよ。」

「いや、人の場合がめずらしいんだ。やるべきことを忘れて生きていける動物は今のところ、人間以外、見つからない。」

と、リードは言った。

「だから？」

「病気は治るが、そのあと、どうなるか全然予想が出来ないんだ。」

と、センリが変わって言った。

「予想できない？」

「つまり、直って、なにかを覚えていられるようになっても、私たちのことを覚えているかわからないってことだな。病気の前までの記憶まで戻ってしまって、今までの記憶が全部消えてしまうかもしれない。他にも、記憶ができるようになったら、今までみたいに、なにか特別な部分だけ正確に覚えていることもなくなるかもしれないということだな。」

ラファンがまとめて言った。

「そうなんです。直ることは確かなんですが、その後、どうなるかわからないんです。」

無言の時間が流れた。

「ただいまー。」

明るい声が聞こえた。

「リザ。おかえり。」

と、母親のメルは無意識のうちに返事をしていた。

「ただいまって誰？…ミレと同じ顔だー。」

リザは驚いたように言った。こんなにたくさんの方がいるとは思っていなかったのだろう。

「ライズと、そのお兄さんのリードと、その友達のセンリとルイよ。」

「よろしくー。」

リザはにつこりと笑った。やっぱり人懐っこいところは変わっていなかった。

「これ、おみやげ。」

リザの手には魚がいた。かなり大きい。

「あら、今日は魚料理ね。」

と、メルが立ち上がった。

「今日は、みんな泊まっていってくださいますか？」

「あ、いえ、私は帰ります。」

と、ルイは言った。

「そうなの？」

「ええ。ちよつとりザの顔を久しぶりに見に来ただけだから。私はこれで、あ、送らなくていいわ。」

と、立ち上がった全員に言った。

「じゃあね。」

ルイは自分の車で去っていった。

「この魚はローフ湖でー？」

と、切れ身になった魚を食べながらライズが言った。

「ローフ湖？」

センリが聞いた。つい、リードのほうを見つめてしまう。答えが出てくるのがわかっていているかのよう。リードは相変わらず、木の椅子にびくびくしながら浅く座りつつも説明した。

「正式にはロントフミラ湖というんだ。最後にくつついた地方との間にできた湖のことだ。スーハーの森と、しかし、魚がいるのか？」

「うん。入れたら増えたらしいの。」

と、ミレが言った。

「入れたら？」

「水質調査の結果ー、あの湖の周りがあるー草がえさになるみたいなんだ。で、入れてみたら、敵がいなくて増えたー。」

「勝手に増やしていいのかい？」

と、聞いていたラファンは聞いた。

「食料用だからいいんですよー。国の了解も得たしー。」

と、ライズが言った。

ピピピピピピピピピピピピピピピピ。。。

突然、音が鳴り、静まり返った。

「あ、私だ。」

リードが腕にしている時計を見ていった。

「ちよつと、失礼。」

と、リードは席を立った。

「あれ、何？」

と、リザが聞いた。

「電話だよ。」

「それもー、緊急みたいねー。」

と、ライズも言った。

「緊急？」

「うん。兄さんにー、あーやって食事中にかかってくるのはー、緊

急の時だけー。」

「そうなの?」

「うん。リードに電話がかかってくることは滅多に……。」

そこまで、センリが言いかけたときである。リードが慌てて戻ってきた。

「大変だ! リトが薬を持ち出したらしい!」

「薬って……あの?」

「あの! だ! 申し訳ないが、ミレ、私たちは大学に戻る! ライズ、お前は?」

「一緒に行くよー。」

三人は慌てて食事も途中で去っていった。

## 2話 再びの逃亡

ファルト側では

「大丈夫かしらねえ。」

と、食事の片付けをしながらメルが言った。すっかり、満腹になっているのか、ゆったりとしているラファンが返事をした。

「うーん。たぶん、薬は完成したと言ってもたぶん、まだ国にはまだ申請中なのか、していない状態だろう。」

「申請？つてなに？」

リザは首をかしげた。どうやら、すっかり癖になっているようだ。

「薬を作ったら、国に伝えて、国が認めてから初めて販売したり、たくさん作ったりできるんだよ。」

ラファンが言った。

「でも、まだ人に使用していない薬を持って行ってどうするつもりなのかしら？」

と、メルは言った。食後のお茶を入れながら言った。

「一番考えられるのは売名だが。」

「売名？つてなに？」

「薬を学会に提出して、僕が造りましたって先に言うんだ。そうすると、その人の名前が登録されるんだ。」

「そうすると、どうなるのー？」

「いままで、作れなかった薬を作ったんだ。とても、すごいことなんだよ。」

ラファンは丁寧に説明をした。たとえば、明日には何も覚えていなかったとしても、ラファンは説明を面倒に思うことは無かった。

「売名なのかしら？」

「わからん。お、ミレ、電話光っているぞ？」

確かに、ミレの腕の時計が光っている。

「メールだ。」

ばたばたと、ミレは自分の部屋に行った。巻いてあるスクリーンをひっぱりだして電話をそこに反射させた。

「ミレ！大変よ！リードがそっちについたら、一緒に逃げて！リザもつれて、森のほうへよ！」

画面いっぱい怒鳴っているのは、ルイだった。

「どうしたの？」

「研究員だった、一人が薬を持ち逃げしたの！勝手に知人に使用したらしいのよ！そしたら、その人物が失踪したそうなの。持ち逃げした本人も見つかっていないわ。」

「失踪？」

「国からの失踪なの。いま、研究施設にも国からの関係者が来ているわ。彼ら、リードたちを逮捕するつもりなのよ！」

「逮捕？なんで？」

リザは目を丸くした。

「無断での薬物使用の違反よ！ついでに、失踪者をかくまっている恐れがあるとかないとか、勝手に言っているけど、とにかく捕まえる気よ。あいつらに、捕まったら、終わりよ。リードたちにはもう伝えてあるから、そっちに戻っているはずなの。」

「ミレー。」

玄関のほうから声が聞こえた。

「ライズの声、きたみたい。」

「とにかく、こっちでできるだけ足止めしておくから、逃げて。」

ばたばたと声のほうへ行くと、センリがラファンになにがあったのかを説明していた。ラファンは、ある程度は理解したようで、なにやら、メルに言って荷物を作らせているようだ。

「今、ルイから逮捕連絡が入ったわ。」

「森のほうへ行け。リザがいれば迷わない。ここは我々でどうにかしておく。」

かつて、逃げたことのある身の言葉のせい、重みもあるという

ものだ。

「わかったわ。リザ、行くよ。案内して。」

「いーよあー。」

リザはのんきに言った。

車を隠して、五人は森の奥へと入っていった。

森の中で

「いてっ。」

センリは何かに躓いたようだ。いくら、光る石を前に持っているからといって、足元まではきれいに見えない。

「大丈夫ー？」

「ごめんなさいね。まさか、急にこんなことになるなんて思ってなかったから、石を十分に太陽に当てておかなかったのよ。」

弱い光の石をもちながら、ミレは言った。

「いや、僕もこんなことにあるなんてお思ってなかったから。センリも言った。」

「もうすぐ、小屋だからねー、がんばってねー。」

明るめの声でライズは言った、どうやら一人、なにやら張り切っているようだ。

「小屋ってなんだ？」

センリが聞いた。

「僕とー、リザで湖の調査用に作った小屋があるんだよー。と、いつでも、僕もリザの案内なし来るのはーちょっと怖いけどねー。」

「そんなもの、いつ作ったんだ？」

センリは目を丸くして言った。

「私も最近知ったのよ。二人して、なにかやっているのはわかってるんだけど、なんせ、リザは返ってきたらすぐに寝ちゃうし、ライズさんは黙っているし。」

「だってー、出来てから見せようと思ってたんだよー。まさか、こ

んなことで使用するなんて思ってもいかなかったし。もうすぐー、ほら、あれだよ。」

昼間に見ればそれは、立派なものに見えたのかもしれないが、夜でしかも、電気も通っていないような場所だと、少々怖いものにさえ、見える。

中に入っても、光が足りなさ過ぎた。中での記憶がはつきりしているライズとリザ意外は、入ってすぐの部屋で大人しく朝を待つことになった。

「ねえ、リード兄さん。」

顔がぼんやりと光に浮かび上がって、ちょっと怖い。

「なんだ？」

「どうして、追われることになったの？ ルイから薬が盗まれて、それが他の人に使用された。そして、盗んだ人も、薬を使用した人も逃げている。そこまではわかったの。でも、それだけで、なんで国の関係者に追われることになったの？」

「それが、よくわからないんだ。」

センリが答えた。

「わからない？」

「そうだ。よくわからない。急に国へ連行するといってきたんだ。あそこは空の上だからな。身動きも取れない。しかし、あれだけ、国の人間が大騒ぎするというのは、薬が効くことによって、なにかしらの問題があったということだろう。」

「問題？」

「それが、なにかはわからんが、そうじゃなきゃ、いくら暇な国の人間でも急にやってきて、連行はないだろう。」

リードは冷静に言った。

「そうね。ところで、薬を盗んだのは、知り合いなの？」

「んー、知り合いというかー、研究仲間だよねえ？」

急にライズが話に加わった。どうやら、こつちの話聞いていたらしい。いつの間に、こつちの部屋にきていたのだろう。

「彼は、リト・シギナル。ルフエ地方からの大学から来ていた。優秀だったが、ちょっと気にはなっていた。」

「なにがー？」

「ルフエ地方から来たと言っていたわりには、地方の話を彼の口からは一切聞かなかった。それに、喋る口調に、なまりが少ない。それに、地方に帰ったこともなかった。」

「なまりはともかく、なんで帰らないと気になるんだ？」

センリが聞いた。

「あの、地方は家族意識が高い。だから、必ず、休みには帰る。それなのに、彼は一切その話はしなかった。」

「そうなんだー。」

「これからどうしよう。もちろん、森でも暮らせないことはないけど……。私とリザはいいけど、兄さんたちはそういうわけにもいかないでしょう？」

ミレはためらうように言った。

「そうはいかないよ。あれはリザのための薬だ。」

「そうだよー。」

ライズも同意した。

「とりあえず、今日は寝て、明日考えよう。ここにポワポワがあつて良かった。」

「おやすみー。」

「おやー。」

次の日の朝

「だれえ？」

リザは聞いた。一日たつてすっかり、ミレ以外の男三人は忘れられていた。

「じゃ、ローファー湖に魚を取りに行きながら、教えるわ。ここにいてね。」

ミレは三人に言った。

「わかった。」

そして、ミレとリザは網を持って、出かけていった。

「これから、どうするー？」

「薬を取り戻すに決まっているだろう！」

力強くセンリは言った。

「どーやってー。」

「まず、リトの言っていたロフィ地方というのが、ここからそんなに遠くない。歩きしかないとこが不便だが、いけないこともないだろう。そこに行ってみよう。もちろん、国の連中も来ているかもしれないが。」

「でも、本当かどうかわからないじゃないか。嘘かもしれない。」

「そうだよー。疑わしいって言ったのー、リードだよー。」

「しかし、それ以外手がかりがないんだからしょうがないだろう。」

「うーん。まあねえ……。」

しぶしぶながらもライズも同意した。

「それしかないかあー。」

センリもため息をついた。

「それにしても、いいできの小屋だなあ。」

「うんー。ラファンに聞きながらー、リザと建てたのー。まあ、泊まることなんてめったにないけど、なにかと物を置いておくのに便利だからねえ。雨の時とかも、便利だしー。」

ライズは、この森の調査のためにほぼ、毎日森へきているようだ。

「どの位調査が済んだんだ？」

「とりあえずー、横の大きさはわかったよー。僕らの地方の三倍はあるよー。でねえ。電波が乱れるのは、森から六十歩も歩いたところから怪しくなるねー。原因はたぶん、この植物にあるみたいなんだけどー、確かじゃないー。」

「じゃ、森の奥はどうなっているのかわからないんだな？」

「うん。まだ半分のローフ湖までしか終わってないのー。」

「ここから、遠いのか？」

「ローフー湖？全然。オレ一人でもいけるもーん。」

遠くなると、迷う可能性が出てくるからか、必ず、リザを連れて行っている。

「まあ、調査をしているといつても人数がいるわけじゃないからなあ。そんなに急激には進まないよなあ。」

「そうなんだよねえー。まあ、一人じゃないからいいんだけど。」

センリはふと思いついたように言った。

「それにしても、リザたち遅くないか？」

「そうだな。ライズ、魚を取るのに、時間がかかるのか？」

「まさかー。ミレの持っていた網は自動的に巻き上がる、便利なものだよー？俺が作ったんだけどー。あれだったら、リザ一人でも取ってこられるよー。」

「遅いな。」

「うん。」

「見に行くー？」

「そのほうがいいかもしれん。」

「そうだね。」

「行こうー。案内するよー。」

ライズが先頭になって歩き出した。

ローフー湖で

明るくなった森の中を二人は迷うことなく歩いていた。その道で、ミレはリザに説明をしていた。

「いい？私と同じ顔をしていたのが、双子の兄たちよ。」

「お兄さんなんていたの？」

「うん。上が、リード兄さんで、もう一人がライズ兄さんよ。」

「三人いなかった？」

「うん。彼は兄さんの学校のクラスメイトなのよ。センリって言う

の。」

「センリー？」

「そうよ。ああ、ここね。きれいな湖ね。」

湖面に太陽がかすかに光ってキラキラしていた。

「ねー。でね、その網を投げるのー。」

「うん？」

「そうー。勝手に巻き上がってくるのよ。」

「へえ。便利ねえ。」

ミレは感心したように言った。

「うん。作ってもらったの。」

「誰に？」

「……誰にだっけ？」

リザは首をかしげた。

「あ、ほらほら、上がってきたわよ。引っ張るわよ。」

「うん。」

魚たちはあまりに多く繁殖していたのかもしれない。いくら自動的に巻き上がっても、網を湖から引っ張り出すには、手動しかない。

「重いー。」

「うー。」

網を持ち上げることに気を取られていたせいか、二人は後ろに誰かが来ていることに気がつかなかった。

「ミレー。リザー。」

「ミレー。リザー。」

三人の声が森の中から湖まで響いていた。

「こつちだよー。」

「本当だ。湖だ。」

それは本当にぼつかり現れるものだった。しかし、木が大きく、上からでもよく見ないとわからないかもしれないようなものだった。

「いないな。」

「そうだねえ。もぐるわけでもないのに。」  
「これは？」

リードは足元から、なにやら引つ張り出した。

「あ、網ー！」

「お前が作ったやつか？じゃ、リザたちは？」

「どこだろうー？」

「誰だ！」

突然センリが怒鳴った。

「リト！」

そこにいたのは、リトだった。

「ひさしぶり。探しているのは、二人の女の子か？」

「そうだ。」

「僕たちが、預かっているよ。」

「どうして、お前がここにいるんだ！妹はどこだ！」

「彼女たちに危害は加えていない。むしろ、こっちが怪我を負った。」

リトは、ため息をついたように言った。

「まさか、あんなに強いとは思わなかった。」

「ミレはともかく、リザも武道をやる。へたに手を出すと、怪我を負う。」

「なぜ、ここにいるんだ？国の連中が探しているぞ。」

リードは静かに言った。

「わかっている。でも、先に弁解をさせて欲しい。」

「妹は！」

「絶対に無事だ。いまから案内するが、僕に危害が加えられたら、行き先はわからないぞ。」

リトは言い切った。たしかに、リザなしにこの森を歩くのは、毎日きているライズでさえも避けることだったに違いない。

「いいだろう。」

ぞろぞろとリトの後を歩きだした。

「それで、お前の弁明とは？」

「僕はこの村で生まれ、育った。ここにも地方があると、ほとんど知られていないのは、森に囲まれた地方だからだ。あるとき、その村に男の子が生まれた。その村では、前の酋長が亡くなった後に一番早く生まれた子供がなるものだ。男女は関係ない。そして、彼は酋長になったんだ。それが僕の祖父だ。」

リトは、淡々と語り出した。

「子供は、母親から引き離され、特別な教育を受ける。ほとんどの母親は、それが嫌で子供を隠しておくものだった。けど、祖父の母親は病気でなくなってしまう、子供を隠し損ねた。だから、祖父さんが酋長になった。だけど、子供が酋長になると、その家族は優遇されるんだ。それを求めていた女性がいた。彼女はあと、一週間もすれば生まれるような子供を宿していたんだ。そして、彼女は恐ろしいことを考えた。」

「恐ろしいこと？」

「酋長の殺害だ。」

「殺害？そうかー、君のーおじいさんがその時点で亡くなったらー、その女性の子供が酋長になるのかー。次に生まれてきた子供だもんねえー。」

「そうだ。」

「だけどー、いま、リトがいるってことはー、死ななかつたんだね？」

「あたりまえだろう。」

リードが、ため息混じりに言った。そんなあたりまえ事を言われなくても困るようだ。

「そうだ。祖父は死ななかつた。しかし、その酋長として認めるための儀式の最中に起こった地震のせいで、村人の半分は洞窟の中に埋まった。そこに土地の大移動だ。村自体の半分以上が海の底に消えたんだ。残った村人は、もめた。祖父が酋長になったから、村がつぶれた、逆に、酋長になったから、犠牲者は半分で済んだんだと。」

「そんな、バカな。酋長くらいで、土地がどうこうなるものでは……。」  
「センリが言う。」

「もちろんだ。いまなら、誰もがそう考える。しかし、当時の村の状態は前が森、後ろは海で閉鎖的な村だ。隣の村まで歩いて、三日もかかる。そんななかで、酋長は一種の崇拜の象徴みたいな存在だった。祖父を支持した者たちは村に残った。他の者は、もうすでにそのころには空に上がっていた国へと移動したんだ。」

「国が。じゃ、お前の祖父を殺そうとした女性もそっちに行っただな。」

「そうだ。」

「で、患者は誰なんだ？まさか、その女性じゃないだろう？」  
年を考えると、そんなに長生きをしているはずが無い。

「その女性の孫だ。名前はジル。」  
「孫？どうして、お前のおじいさんを殺そうとした女の孫なんか、助けようとするんだ？」

「いま、現在、酋長はこの村と国にそれぞれ一人ずついる。どつちかが酋長として、決着が付けば、村同士の戦いが終わる。もともとは同じ村だって言うのに。くだらないことだ。」

「どうしてそのジルの記憶が戻れば、まあ、薬で戻ったとしてだけど、その争いが終わるんだ？……彼女が知っているのか？お前の祖父を殺そうとした事実を。」

「彼女は知っている。彼女の祖母が残した遺書のありかを。」

「遺書かあ。だけど、それに書いてあるってどうしてわかるのさ？」  
「ずっと調べていた、というわけか。ところで、さっきから気になっっているんだが、君は誰だい？」

リードはその男の方を向いた。いつの間そこにいたのだろうか。そっそりと、リトと同じような格好をした青年が立っていた。センリは聞いた。

「リザは?! 僕の妹はどうした!」

「私の村にいます。もちろん、ミレさんも一緒にいます。危害など決して。」

「どうして、連れて行ったの?」

「いきなり、現れても、信用していただけないでしょう。私は、リザさんとは顔なじみです。あ、私はリトと同じ村の生まれのザイルといいます。」

その言葉があまりに意外だったのか、センリは目を丸くした。

「顔なじみ?」

「ええ。よく、ローフ湖で見かけていました。私はよくあそこに魚を取りに行きます。今回、無理やりつれてこようとしたら、五人ほど村人が負傷しました。私が顔を出したほうが早かったようです。」

顔なじみとわかったからか、センリの顔のこわばりが少し取れた。

ザイルの顔でわかったということは、リザは彼の顔を選別できるということだ。

ザイルは、歩き出した。道のよく分らない、リードたちは二人についていくしかなかった。そのまま、リトは話を続けた。

「僕は、村から洞窟まで何度も出かけた。もちろん、いまの技術で調べるためだ。火薬や成分や、いろいろ。海にも潜った。昔の村のものはほとんど、流されたり、腐食したり、砂に埋まったりして見つからなかった。そんなときに、彼に出会った。」

今度はザイルが話し出した。

「私は、国から来ました。私の祖父や祖母は、新しい酋長のたたりだと言われて、国へ移動したんです。しかし、祖母は、本当は自分が生まれ育ったこの村に戻りたかったんです。祖父は隣の村から来たので、そうでもなかったようです。そして、ずっと、私に話して聞かせていました。私は、大きくなってからこの村の歴史を調べるに当り、疑問に当たりました。あの洞窟は、沈んだ村の部分とは違うプレートに乗っていました。村が沈んだこと、洞窟がくず

れたことは違うことだと気がついたんです。たくさん村人を当たりました。しかし、もうほとんどが話してくれなかったり、亡くなっているか、病気だったりします。」

「年も年だろうしねー。ぼくらのおばあちゃんたちだって、もういないし。」

「そうなの？」

センリが聞いた。

「祖父は生きているが、祖母は亡くなる時を自分で選んだ。それで？」

リードは続きを促した。

「最終的に、我々が知ったのは、そのジルという人物に遺書を預けているということ。それには、全てが書かれているということ。しかし、ジルはレフアンド病で覚えていないということなどです。」

「でもー、なんで知っているのー？」

「ある女性が亡くなるときに話してくれました。彼女はその女性の友人だったそうです。」

ザイルが言った。

「さつきから気になっているのだが。」

「なんででしょう？」

「一般的に遺書というものは、自分の子供にでも渡さないか？なぜ、遺書が急に孫であるジルに渡っているんだ？」

「親は行方不明です。」

「行方不明ー？え、女性なのー？男性なのー？」

「私は女性だと聞いています。噂では、あるとき、急に女性は孫をどこからか、連れてきたそうです。」

「じゃ、本当の孫なのかは分らないんだな？」

「いえ、相続を考えたときに、調べたそうです。間違いなく、その女性の血縁者だというのはわかっています。」

「そうか。」

「……なにを考えているのー？」

ライズが聞いた。  
「いや、別に。」

### 3話 森の奥には・・・

木の上の村

「見えました。あれです。」

ザイルが指さす方を見ると、村は、地面ではなく、木の上にあった。

「木の上にあるー。」

さすがに、リードでさえも、目を丸くしていた。

「ええ。地面が割れて、それ以来、木の上で暮らしているようなんです。でも、誰がそうし始めたのか、今ではわかりません。」

「リザは？リザ！」

センリは走り出した。

「待つてくださいー！」

ザイルは止めたが、その声も聞かずに、センリは走り続けた。慌てて、リードもライズも走り出した。

「リザーー！！！」

村人は誰かが襲ってきたかのように見えた。あわてて、武器を持ちだし、攻撃した。

「やめろー、やめるんだ！」

リトの声も、届いていない。

「敵じゃないんだ、殺すな！」

そして、やっとリトとザイルの声が届くようになった頃、センリはひどい有様になりながらも、リザを抱きしめていた。

「リザ。大丈夫だったか？」

突然の訪問者に驚いたようだ。一日たてば忘れてしまう、リザにとって名前だけしか知らない人物が急に抱きついてくるのは恐怖にも思えるかもしれない。それでも、おそろおそろ、聞いた。

「あなたこそ、大丈夫？」

「ああ。だい、じょう……。」「  
ばたん。」

「センリ！」  
センリが倒れ込んだ。

真つ暗な中で、リザはぽつんと立っていた。そして、言った。

「さようなら。」

リザが言った。

「リザ……どうして……。リザ！」

自分の大声で、センリは目を覚ました。リードとライズが同じようにのぞき込んでいた。

「大丈夫か？」

「リード、リザは?!」

慌てて、センリは体を起こした。

「うっ。」

あっちこっちが痛む。

「ここよ。」

ミレに連れられて、リザがやってきた。どうやら、みんなの説明が終ったらしい。リザは怯える様子もなく、部屋に入ってきた。

「リザ。よかった。」

センリは、やっとほっとしたように言った。

「大丈夫？」

ぐるぐるに巻かれた包帯を見て、リザは心配そうに言った。

「ああ。まあ、ちょっとあっちこっち痛むが。」

「お前も、向こうにさんざん、怪我させているからな。もうちょっと待てば、なんの争いもなく行けたものを。」

「そーだよおー、こっちに着いたら、ミレまで村の人、倒しているんだもん。上からふつてきて、びっくりしたよ。」

「だって、敵じゃないって言っているのに、言うこと聞かないからよ。大丈夫よ、そんなに大きな怪我はしてないわ。」

「よかった……。」

「大丈夫でしたか？」

リトが覗き込んでやってきた。

「リト。ちょっと話がある。ザイルにもだ。」

そう、リードが言った。

「今ですか？」

「今だ。」

ザイルもやってきた。

「大丈夫でしたか？」

「ええ。ところで、嘘はいけないと思うが？」

「嘘？」

ザイルは怪訝な顔をした。

「リトは酋長じゃない。酋長はザイルのほうだ。リザたちをつれてきたのも、君の考えだろう。」

リードはすらすらと言いだした。

「なぜ……。」

「私がこの地方のことを知らないとも思ったのか。ここはロスト地方というんだ。確かに、文献はこの地には少ない。しかし、かつての村民が移住した国のほうにはあるんだ。昔の功績を利用して、見た事がある。」

「いつの間に……。」

センリも知らなかったようだ。

「あの国の膨大な文献はなかなか興味深かった。この地方の酋長は、基本的にその場所から一生出られない。この森の中だけだ。出ると災いをもたらされるといふ考え方だからな。そんなものは、迷信に過ぎないが、否定する材料が見つからない以上、昔の人々は信じるだろう。」

「ええ。たしかに、まだ過半数の人間が信じています。酋長が村を出るときは、村の終焉を差すのだと。」

ザイルは頷いた。

「ついでに、リトには刺青がない。」

「刺青？あー、本ただー、ザイルにはあるー。」  
ザイルは目を丸くした。

「このことも？」

無意識にその部分に手をやっていた。たしかに、なにやら、文字の  
ようなものが入っている。

「これ、刺青っていうのー？」

「そうみたいね。」

初めて聞く、ミレヤリザはじろじろと眺めた。

「それも、文献に載っていた。国にいる酋長にも同じ物が彫られて  
いるそうだ。生まれて間もない頃に入れられるものだ。普通は前の  
酋長が亡くなってから新しい酋長に入れられるから、一人だけが所  
有できるものだ。最近では見なくなっただが、砂漠の近くの地方では、  
まだ行われている習慣のはずだ。」

「相変わらず、物知りだな。」

「珍しいー趣味ー。」

「ほっとけ。それで？お前が薬を使用したのは誰なんだ？あれは、  
まだ飲むまでに至っていない薬だ。体に入れるには注射しかない。  
その技術があるのも、リトのほうだしな。国にいたことがあるんだ  
らう？」

「あれを使用したのは、さっき話した孫のジルだ。」

リトは静かに言った。

「本当は完全回復の薬ができるまで待つつもりだった。それで、実  
験段階になってジルのことを言うつもりだった。患者の知り合いが  
いると。」

「ところが、もうすでにリザがいた。そうだ、リザのことを話した  
のは、数日前だったな。」

センリは思い出すように言った。

「ああ。実用化できるという範囲が見えた時点でみんなに話したん  
だ。」

「私ー？」

「そう。薬は君に投与されるはずだった。」

「どうして……。」

リザは戸惑ったように言った。

「それは後で、説明する。それより、なんで、投与したほうの患者がいなくなっただんだ？」

センリは聞いた。

「わからない。」

「わからないーどーゆーこと？」

「あのとき、国の病院の中に入って、こっそりと薬を投与した。ところが、ジルの目が覚める前に警報が鳴っただんだ。」

「病院や病室に入ったときには、警報はならなかったんだな？」

「ああ。急に大きな音がなったんで、驚いた。」

「で、逃げたー。」

リトは頷いた。

「そうさ。慌てて、こっちに戻ってきたらもう大学院には手が回っているし、リードたちは捕まりそうになっているというのを聞いた。それから、あのあとに、ジルが姿を消したという話も。それで、この村に戻ってきたんだ。」

「それで、湖で魚をとっていた私たちに会ったというわけね。」

「はい。捜しに行く手間が省けました。私が連れてくるように言っただんです。急に現れても信じていただけないだろうと思って。みなさんが武術を使用するというのはリトから聞いていましたし、そのリードさんは爆薬も、その、使用されると聞いたものですから。」

「ためらいがちにザイルは言った。ライズはリードのほうを見つめて聞いた。」

「え？もしかしてー、ディブル氏の？」

ディブル氏とは、学校の建築担当の教員だが、爆薬を作るのが趣味という変わった人物だ。三年以上前、彼の作った爆薬で学校のほつんどを倒壊させたこともある、本物だ。あれから、たくさんの実験

データが得られたといつて、新しい実験をするのだと言っていた。

「ああ。相変わらず、自分の研究の合間を使って、手伝っているよ。火薬を使わずに、風圧だけで爆破する物を作っている。水圧のは平坦部分でしか使えないことがわかったからな。」

「よくわからない！」

リザは首をかしげた。

「山のとっぺんで水を大量に使ってみる。当然水は下に落ちるだろう？」

センリが説明をしている。

「うん。」

「その量が、その地方の三日分の雨の量と同じだったら？それが一気に、天辺から落ちてくるんだ。」

「困る！」

「そういうことだ。」

リードも頷いた。そんな説明でいいのだろうか？

「ここも、川が近くにありますが。そんなものを使用されては、村は一瞬でだめになってしまいます。」

ザイルの顔がいまさらのように青くなった。

「それで？オレたちをここに連れてきた理由はなんだ？ミレヤリザまでかさらってきて。」

「実は、一緒に彼女を探して欲しいんです。」

リトは思い切ったように言った。

「当然！、孫のことだよねえ？」

「そうです。」

「なんで、僕たちがそんなことに付き合わなきゃいけないんだよ！いってえ……。」

怒鳴ったら、体に響いたようだ。

「まず、どうして彼女の記憶を元に戻す必要があるのか、次に、彼女の行きそうな場所の心当たりはあるのか、最後に、彼女を捕まえてどうするのか、聞こうか。」

リードは落ちついたように言った。

「リード！今回は反対だぞ！ううう……。」

やっぱり大声は体によくはないようだ。

「それは……ご説明できません。でも、決してご迷惑をかけるようなことは！」

「もう、迷惑ならかかっているわよ。リードたちが捕まるところだったのよ？いまさら、戻っても国の連中に捕まるだけじゃない。」

「そうなのー？」

リザは一日たって、まだ昨日の説明をされていないせいか、昨日のことはきれいさっぱり忘れていたようだった。

「そうか。じゃ、協力はできない。このまま失礼させていただきます。もちろん、国の連中に捕まる気もない。捕まったら困るから手元に置いておきたいんだらう？」

「ええ。その通りですが、しかし、彼女が見つかったら必ず、あなたたちは逮捕されるなんてことはありません。ご協力を。」

ザイルは静かに言った。

「断る。」

「リード兄さん……。」

「ところで、これはなにに見えるかな？」

リードはなにやら、懐から取り出した。ちいさな、銀色の球だ。米粒三つ分の大きさだ。

「なにー？」

「いいものだ。さっきの説明を求めろ。」

「それは、できないと……！」

「お前じゃない、リト。こっちのザイルに聞いてるんだ。」

「……申し訳ありませんが、これはこの村の問題でして……。」

「そうか。」

そういつと、リードはひょいとそれを下に落とす。

「ぼおう！」

一瞬にして風が湧いた。

ザイルは真っ青になった。

「もしかして、それは……。」

「わかったようだな？私を怒らせるなよ？今度説明を断ったら、これだ。」

リードは、もっと大きめな球を出した。拳骨くらいあるだろうが。「身体検査はきちんとしておくべきだな。私は風圧爆弾を作っている、と言っただけだ。まだできていないとは言っていない。これは、以前にもらってきたものだ。」

リードはそれを手の中で転がしながら言った。

「デイブル氏の本業は建築だ。だから、それに合った爆破を考える。だが、これは風圧が強すぎた失敗作だ。もちろん、オレもただではすまない。さて、どうする？」

リードは笑った。

「怖い……。」

リザはミレにしつかりと捕まった。ひっそりとミレが言った。

「兄さん、静かに怒るタイプなのよねえ。」

「……わかりました。ここでは無理ですので、こちらへ。」

「ザイル殿。」

「しかたがありません。こちらのミスです。」

リードとライズはセンリを支えながら、村の外に出た。森の奥へ行くと、ぽかっと空間が現れた。森から完全に出た形になっている。

「ここは？」

「うわあー。海だあー。」

崖の下を覗き込んだ、ライズが感銘の声をあげた。

「はじめて見たあー。」

「本当ねえ。」

ミレも驚いたようだ。

「僕もはじめてみたよ。」

「取った！」

振り向くと、海を見つめて油断していたのか、リトが、リードか

ら銀色の球をとりあげていた。

「リト！」

「これで、攻撃はできない！」

後ろから、ぞろぞろと村人がやってきた。なにかしらの武器をかかえている。

「お願いです。我々は攻撃するつもりはありません。大人しく、この村にいてください。」

ザイルは静かに言った。ミレは後ろを見たが、崖しかない。

「無理ですよ。後ろは海しかありません。」

ザイルが言った。

「さあ、降伏するんだ！」

リトは叫んだ。しずかな空気が流れた。リトは銀の球をザイルに渡した。海の波の音しか聞こえない。その沈黙を破ったのはやっぱり、リードだった。

「さて、それは、どうかな？」

「なに？」

リードは後ろを指差した。なにやら、遠くからやってくる。ブーメランのような形をしたようなものがたくさんこっちに向かって飛んできているのだ。

「あれは……国の翼だ！逃げろ！」

村人とリトは慌てて、森の奥へと入っていった。

「どうして、ここが！」

ザイルは言った。

「この空間は、ちゃんと電波が入る。森から完全に出たからな。国がそれをつかんだだけのことだ。」

「本当！機械が動いている。」

ミレも腕時計を見ていった。

「このやるー。くらえ。」

ザイルは球を投げた。センリはリザを守り、ライズはミレの前に立った。

「うっ。」

バキッと音がした。

「……あれー？」

必死で目をつぶったライズは目を開けた。

「なんともない？」

ミレもほっとしたのか、体の力を抜きながら言った。

「偽物だからな。」

平然とリードは言った。いつのまにか、ザイルを捕まえている。

さっきの音は殴ったものらしい。

「だって、あの小さいのは？」

ミレが聞く。

「ニセモノー？」

「あれは本物だ。二人に見せようと思って持ってきたものだ。まだ、あんなに大きいのは作れてないよ。ああ、きたな。」

「国の人間じゃ、捕まるわ。」

「大丈夫だ！信じる！」

リードが大声で言った。

「大丈夫ですかあ？！」

国の翼に乗った人物が聞いてきた。翼が近くに来ると強風なので、怒鳴るしか会話方法がない。

「ああ！これが、酋長だ！他の連中は森の中だ！」

リードも負け時と怒鳴った。

「わかりましたあ！」

次々と、やってきた翼から、兵士が降りては森の奥へと入っていった。

「こちらへ！」

兵士の一人が叫んだ。

「兄さん！」

「いいんだ、おいで！」

リードの指示に従い、全員が乗った。扉が閉まると、外の暴風が

嘘であるかのように静かだった。運転をしていた人物はおだやかに聞いた。

「とりあえず、どこへ行きますか？」

「家のほうに連絡は？」

リードが聞いた。

「済んでいます。」

「じゃ、大学のほうへ。」

「わかりました。」

翼は針路変更をして飛び出した。

「兄さん、一体？」

「後で説明するよ。リザも寝ているし。」

たしかに、リザはミレに寄りかかって寝ていた。どうやら、夕方の眠る時間だったようだ。リードはにっこりと笑った。

## 4話　そしての結末

大学にて

「やあ、ひさしぶりだねえ。」

「こんにちは。」

三年以上の月日が経っていても、ディブル氏はあいかわらずだった。研究室は妖しげなものに囲まれていた。その奥に、リードたちの研究室があった。

「こつちだ。」

リードに促されて、研究室に入ると、ルイがいた。

「みんな！よかったあー。」

ほつとしたようにルイが言った。それでも、抱きしめるのはリザだった。

「だ、誰？」

「この子達のクラスメイトよ。」

ルイは、リードたちを見つめて言った。

「悪かったな、心配させて。」

全然悪びれた様子もなく、リードは言った。

「本当よ！」

「どーゆーことなのさあ？」

ライズは痺れを切らしたように言った。

「ルイ、お茶を頼む。ディブル氏のお勧めだ。そんなに、まずくない。良い言い方をするなら、ただ個性的な味だ。さて、まずは、さかのぼること、三ヶ月前のことだ。」

リードは話し出した。

三ヶ月前

その日、リードは一人で研究室に残っていた。ドアがノックされた。

「なにか、来ているよ？君宛だ。」

ディブル氏は手紙を持ってきた。

「ありがとうございます。」

「いえ。」

封を切ると手紙が入っていた。手紙は、国の機密機関だった。中を見ると、自動的に消える仕組みになっている。

そして読み終わった。

数日後、しばらくして、研究中、リードは言った。

「さて、そろそろ、人物投与を試してみるか。ひさしぶりにリザにも会いたいし。」

「もう？大丈夫かなあ？せめて飲み薬になってからのほうがいいんじゃないか？」

センリは不安そうに言った。

「なに、恋人かなにかか？」

リトは笑った。

「いや、薬の投与候補だよ。」

リードは言った。

「え？」

「私たちは、彼女を治すために作ってるんだ。そのうち、彼女を連れてくるよ。リザといってね、センリの妹なんだ。」

「そ、そうなんだ。いつの話？」

「とりあえず、ライズが来てからだな。あいつも、反対だと思うけどなあ。」

センリは心配そうに言った。

「みんなで会いに行ったほうが説得しやすいだろうし、ルイもリザに会いたがっていたから、彼女も連れて行こう。」

「リトは、ライズには会ったことがあるよな？」

「なんだか、ぼんやりしているリトにセンリは言った。」

「え、あ、ああ。リードの片割れだろう？一度だけ見たことがある

よ。」

「しゃべってみたか？」

「いや。」

「しゃべると、違っつてわかるぞ。」

センリはニヤニヤしていった。

「どついう意味さー！」

急にライズが言い出した。

「そ、そんなこといったかなあ？」

センリはとぼけた。

「まあ、それはさておき、そのあと、お前が来て、ファルト地方に向かったんだ。」

「待って。機密機関からの手紙には、なにが書かれていたの？」

ミレがなだめるようにに言った。

「今回のことだ。」

「今回のことー？」

リザが首をかしげた。

「そうだ、リトが薬を盗み、国へいく。そのあと、どこかへ逃亡するだろう、ことだ。まさか、あんなに早くに会うことになると思わなかったんだ。」

「……じゃ、リトが薬を盗むってことも、知っていたね？」

ルイが言った。いつのまにか、話を聞いていたようだ。よくみると、みんなの前にお茶が置かれていた。

「ああ。本当は家についてから、国の連中に追われているって、ミレに説明するはずだったが、ルイがしてくれてね。手間が省けたよ。」

ルイは悔しそうに言った。

「ああ！騙された！芝居だったのね？」

「国から来た人物たちは本物の政府関係者たちだよ。ただ、連行は嘘だ。」

「なんで、そんなことになったのよ!」

ルイの怒りはまだ収まらないようだ。

「リトは、自分が酋長だって、話をしただらう?」

「でも、あれは、間違いでしょう?本当はザイルでしょう?」

「そうだ。最初、リトを酋長だと説明したのは、私が何も知らないだらうと思っていたからだらう。そのことに、私が気がつくと思っていなかったんじゃないかな。しかし、ばれて、ザイルが正当な酋長のように語った。」

「待て?その口調からすると、違うのか?事実と。」

センリは驚いたように言った。

「一部は本当だが、違う部分もある。たしかに、あの村はかつて、一つの国だった。それが、半分に割れたことは本当だ。それと、もう一人の酋長がいること、女性であること。彼女は、国に移動したこと。そこまでは本当だ。しかし、彼女のほうが年上なんだ。」

「年上?先に生まれた子ってことかあ!」

ライズは考えるように言った。

「そうだ。つまり、彼女こそが正当な酋長なんだ。もちろん、生まれたばかりで、彼女の意思ではなかったが、正当な酋長のほうが、森を捨てて、国に移動したんだ。」

「どうして、リトたちは、その人の孫のジルに投与するために薬を盗んだの?」

「遺書を手に入れたかったんだらう。万が一にも公表される前に。ジルはもう、あの病院にはいなかったのに。」

「……え?意味がわかんない。」

リザは混乱しているようだ。それは、ミレも同じことのような。リードだけわかっているせいか、なにやら嬉しそうだ。リードは自分の指を二本立てて説明しだした。

「彼女は二人いるんだ。」

「二人?」

「双子ってこと?」

「違う、一人は本人で、もう一人はクローンのようなものだ。」

「クローン……のようなもの？そのものではないのね？」

ミレは考え込んだ。

「クローンそのものだと、当然、違った環境で育てば、基本は同じでも別の人物になってしまう。ジルは自分を実験台にして、記憶の移動を図った。」

「記憶の移動？そんなことできるのか？」

センリは目を丸くした。

「やったらしい。」

そっけなく、リードは言った。あまりこの話に興味はないようだ。

「じゃ、レフアンド病じゃない、彼女がいるってことなんだね？」

「まあ、いるといえ、そうだが……。」

めずらしく、リードが言葉を濁した。

「違うのー？」

「ああ。いることはいるが、メルみたいな子供だ。」

「母さんみたい？」

リザは首をかしげた。

「記憶だけをそのままにしようとして、機械を使用することで成功した彼女は、自分の容姿を子供みたいにした。だから、本人そのものなんだ。そして、その子供が遺書を持っている。体のほうになにをしても、どうにもならない。」

「でもー、なんで、そんなことをするのー？」

リザは聞いた。

「リトたちに殺される可能性があったからだ。遺書の内容を知っているとしてね。子供の、それも機械の姿になっているなんて考えないだろうか？普通の人間は、老いていくものだから。」

「そうねえ。じゃ、ジルは今、機械なの？」

「ああ。そして、記憶がすっかり抜き取られた、体のほうはたしかに、リトによって薬が投与された。」

「しかし、どうなるかがわかる前に、国が動き出した。ジルと遺書

を守るために。」

「どうして？」

「今の国にいる酋長は、機械の彼女よりも幼い赤ん坊だ。その子供は、。ついでに、今現在の国王の孫にもあたる。」

「孫？」

リードが聞いた。リザは理解することをあきらめたのか、聞くことに専念していた。

「だから、機密機関から手紙が来たのね？」

「そうだ。国王候補とある地方が闘争しつづけているのはまずいからな。だから、国が動き出したんだ。以上だ。」

リードはお茶を飲んで顔をしかめた。

「あいかわらず、へんな味だよなあ……。」

「待つてよ。」

ルイが止めた。

「なんだ？」

「リトたちは、どうなったの？それに、ザイルって人はどうなるの？なにがしたかったの？国に送られたのはわかっているけど。」

「そういや、そうだなあ。」

「ああ。これは予測でしかないけれど、ザイルは自分の祖母が殺人の計画をしていたことを知っていた。そしてそれが本当に実行されたからあの地方の半分が消えたのだと。それが文章として残っていることを知った。その文章がジルの手元にあることがわかった。それを手に入れたかったんだろう。」

「なんでー？」

「いま、村同士で戦いが起こっているのは、どっちが本物の酋長なのか、もめているからだ。しかし、遺書が発表されたら、はっきりする。なにかの拍子でそれが村人に知られてみる。村人は出て行くか、ザイルは追い出されるだろう。それを恐れた。」

「それで、文章を手に入れるには、ジルのレフアンド病を治さないところにあるかわからないということなのね？」



振り向くと、ライズとセンリ、ルイも来ていた。

「結構、早く着いたねー。」

「こんにちは。」

「さあ、中へどうぞ。」

メルがにつこりと笑った。

「どうぞ。」

メルは夕食を出した。

「ありがとうございます。」

「突然、大勢ですみません。」

「大丈夫よ、今日帰ってくるって、連絡もらっていたから、まだあるわよ。」

「それにしても、なぜ、国からリード君のところへ手紙が来たんだ？」

センリが聞いた。リードはまだ、木の椅子になれないようだ。

「ええ、実は前回の、エーアイキラー撲滅の功績をたたえられて、なにか、くれるっていう話があったんです。ずいぶん前に。」

「え、お前にだけ？」

「代表としてね。いや、しかし、お前にも関係あることだ。国からもらったのは、レファンド病に関する全資料。それと、国の文献を読む権利を要求した。」

「全資料ー。そんなものがあつたんだー？」

魚をほうばりながらライズは言った。

「あるんだ。ジロン・レファンド氏。レファンド病の名前は彼からきている。そこまでは知っていたんだが、大学にもそれ以上のことは載っていないかった。そこで、研究するということを伝えて、文献を見せてもらったんだ。」

「へえ。」

センリは感心したように言った。

「そういえば、病名を誰が名づけたのかも知らなかったな。」

「うんー。」

「違った形式の記憶障害だと証明したのは彼だ。彼の残した文献が残っていた。始めからだともっと時間がかかったかもしれない。しかし、彼の文献のおかげで、こんなに早くに治療方法の手がかりがつかめたんだ。」

「なるほどね。」

「そうか、君がレファンド病の研究をしていることを知っていたから、君の周りに薬を持っていくだろう、人物がいるだろうことを国は知っていたんだな。」

納得したようにラファンは言った。「ええ。そうだと思います。あれがなきゃ、遺書のありかはわからなかったでしょうし、発表される前に、というあせりもあったのでしょう。」

「それで、薬はどうなったの？」  
メルは心配そうに聞いた。

「そのことで、今日はずかかったんです。今回、彼らの逮捕に協力する代わりに、レファンド病の体の提供が行われました。そこで、様子を見て、改良を重ねてからの投与にしたいと思うので、申し訳ありませんが、もうしばらくはこのままです。」

「体って、ジルのものよね？」

ミレが聞いた。

「そうだ。脳の様子は当然移動されているから、見ることはできないが、体に生じる反応は見るができる。しばらくは、研究の続行にあたる。ルイも手を貸してくれるそうだ。」

「ええ。大学のほうで、リトがいなくなった分をどうするかって言うていたから、こちらから行きますって言ったの。リザにも私のことを覚えて欲しいし。」

「私にー？」

ルイはにつこりと笑った。

「今度は一緒に魚を取りに行きましょうね。」  
「そうだねー。」

リザも笑った。

その後、リトたちは数人の村人以外はそれぞれに捕まった。彼らは知っていたのだ。ザイルが本物の酋長ではないことを。しかし、村を守るために、隠しつづけていたそうだ。

なにも知らされていなかった村人だけ、村に戻った。村はライズが引き続いて、研究するということがそのまま残った。

遺書は正式に発表され、小さな村と国にいる村人との争いは終わりへと向かい始めた。

それから、三十年後、刺青を持った子供は国王になった。

「たしかに、体は渡したわよ。」

それはカチャカチャと、音を立てながら言った。

「ありがとうございます。」

リードはゆっくりとその機械だらけの少女に頭を下げた。

「いいえ、今回の作戦のお礼よ。本当に見事だったわ。おかげで、私の体も死なずに、遺書の発表ができたわ。それにしても、すごい作戦だったわね。国があなたがたを捕まえるという動きによって、彼らを自分たちの獲得に向かわせるなんて。」

「さすがに、私もあんなに早く、彼らに会うことになるとは思っていませんでしたよ。もつと時間がかかると思ったんですけどね。」

「そうかしら？あなたはなんでも見通してそうよ。」

少女はカチャカチャ音をさせながら笑った。

「そこまですれば、もう少し、早くにレファンド病の薬も完成したと思います。あなたが、機械に記憶の移動をする前にね。」

「そおねえ、でも、とくに後悔はしていないわね。危険を伴うことはわかっていただけ。そうそう、脳を移動させたら記憶が戻ったということは、原因は頭じゃないのかもよ？」

「そうですね。ゆっくり、研究してみたいと思います。」

「ええ。大事に扱ってね。それじゃ。」

「では。」  
「リードはまた、ちょっと頭を下げて電話を切った。」

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8511a/>

---

この地の向こう 1・5章

2009年6月16日15時47分発行